英語科研究主題

# 『伝える力』を育む授業の創造

## ～振り返りを生かす学習過程の工夫～

大矢　裕子　　髙杉　廣張　　関原　寛明

## １．主題設定の理由

◆英語教育の動向から

文部科学省は，グローバル化に対応した教育環境づくりを進めるため，小学校における英語教育の拡充強化，中学校における英語教育の高度化を目標に「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」を策定した。中学校段階で英語教育に求められているのは「身近な話題についての理解や簡単な情報交換，表現ができる能力を養うこと」である。

この中では「英語を用いて何をするのか，何ができるようになるのか」を意識することが重要であるとされている。適切な語句を用い，正確な文法や構造を用いて書いたり，話したりすることが基盤となり，「自分の意見を相手に伝える」「必要な情報交換をする」「相手の言葉の意図を理解する」といった活動を行うことが求められているのだと考える。

本校英語科では『伝える力』を「身の丈にあった英語を常に更新させながら用いて，自分の言いたいこと，考えや気持ち等を話したり，書いたりするなどして伝え，伝え合うことができる力」と定義して研究を進めてきた。『伝える力』は，上記に挙げたような活動を行うために不可欠であると考える。

◆これまでの研究との関連から

平成23～25年度は，研究主題を「『気づき』を促す授業の工夫」とし，『伝える力』の育成を目指してきた。「既習の知識を活用すれば，伝えたいことを伝えることができる」という生徒の「気づき」は，『伝える力』だけではなく，ひいては，英語学習に主体的に取り組む態度の育成にもつながると考えた。

研究を進める中で，『気づき』が生徒の正確さに対する意識を高めることは分かってきた。具体的には，語句や表現，文法項目を適切に用いることや，文構造や文章構成を整えること，つまり英語の「形」を改善させることについて，以前よりも丁寧に行う生徒が増えたように思う。しかしその一方で，伝える相手や英語の使用場面を意識して，自分の書いたものを吟味し，改善すること，またそのためにどういう情報を用いるか，については研究の余地があるように思う。

◆生徒の実態から

本校生徒の多くは単語や表現などの知識を豊富にもっており，それほど抵抗なくまとまった文章を書くことができる。それに加えて，ライティング活動の充実に取り組んできたこともあり，具体的で，つながりのある文章を書けるようにもなってきた。豊富な知識は文章を改善させることにも有効に働くはずであるが，実際には，読み手に，書き手の伝えたいことが思うように伝わっていない様子が見られた。生徒が文章を見直した時に「自分の書いた文章は読み手が理解できるものになっているのか」「自分の伝えたいことが伝わる文章になっているのか」と相手意識をもって吟味することができていれば，このような読み手への伝達の状態は防ぐことができると考える。

文章を書くときに「伝えたい」という思いをもつことは重要である。なぜなら，生徒はその思いを原動力として文章を書くからである。しかし，自分の伝えたいことをただ英語に直して文章にしただけでは不十分である。自分の書いた文章を読み手の視点から吟味し，表現や伝える内容の改善を図っていく必要があるだろう。相手意識を高めることが生徒たちの課題であると言える。

本校英語科ではこれまでライティングを重視した授業実践を積み重ねてきており，それにともなってライティングしたものを発表する機会も多く設定されてきた。時間をかけて準備してきたものを発表することに生徒は慣れている。ただその一方で，準備をせずに話す活動には不慣れであり，抵抗感をもつ生徒も多いと感じる。小学校の外国語活動で培ってきた，間違いを恐れずにコミュニケーションを図ろうとする態度を生かして，自分の考えなどを即興的に発信する活動を増やしていく必要があるだろう。

## ２．研究の目的

『伝える力』を育むために，生徒が自分の表現したものを吟味し，発展させようとする授業のあり方を探ること。また，そのための手立てを探ること。

## ３．研究内容（全体研究との関わり）

『伝える力』をもった生徒とは，自分が表現したものに不十分な部分や改善できる部分を発見したときに，どうしたらよりよい表現ができるのかを粘り強く考えることのできる生徒だと考える。そして，全体研究でいう「深く考える」授業とは，他者からのコメントや，自分の気づきを活かして自分が表現したものを振り返り，既習知識を活用することで改善を図っていくことを助長する授業だと考える。本校英語科では，「『深く考える』授業の創造」に，次の２点から迫ろうと思う。

〇自分が表現したものを振り返ること
〇よりよい表現を模索すること

◆自分が表現したものを振り返ること

これまでの授業においても，自分が表現したものを振り返るような活動は見られた。生徒は語句や表現，文法事項，文構造や文章構成などを適切に用いて，自分が書いた文章をよりよくしていこうとしていた。実際に，文章構成について学習した時には，接続詞などを効果的に使おうとする生徒の姿が見られた。

しかし，自分では十分に伝えたいことが伝わる文章を書くことができたと思っていても，伝える相手にとっては読みづらさを感じるものであったり，もう少し書かれた内容のテーマについて詳しく知りたいと思うものであったりすることがあるように思う。これは主として，振り返りをしても，伝える相手の立場にたって読み直してみることができていなかったからだと考える。最終的に「伝えたかったことは伝わったのか」という視点で，自分が表現したものを振り返ることができれば，表現したものは確実に改善されていき、そのための視点が養われるのではないかと考えた。

こうした考えで昨年度から，自分が表現したものを振り返る活動を重視して授業研究を行ってきた。生徒たちが自力で自分が表現したものを見直すことは難しいため，「仲間との交流」を意図的に仕組むこととした。「他者との交流」は，全体研究でいうところの「視点を変える」活動にあたるものと考えており，そうすることで次のようなことが生徒に期待された。

・表現したものを評価，分析するための観点が明らかになる。
・表現したり，改善したりするための新たな視点を得ることができる。
・自分にはなかった考えや発想、さらには文章の組み立て方に気づかされる。
・自分が表現したものに自信をもつことができる。

◆よりよい表現を模索すること

生徒は「他者との交流」によって「視点を変える」ことができるであろう。しかし，「視点を変える」だけでは，自分が表現したものを改善することはできないと考えた。そこで，改善につなげるために以下のことを重視していきたい。

まず，自分の表現したものを改善させるためには，既習知識が鍵となるであろう。どれだけの知識をもち，それらをどれだけ意図した目的のために活用させられるのかによって，改善できるかどうかは大きく異なると考える。既習知識はより良い表現を模索するときに総動員される。そうすることで知識の定着が促され，活用できるものとなるだろう。既習知識を生徒がそれぞれの文脈の中で活用できるようにするためには，普段から，知識を活用させるバリエーションを示し，どのように活用すればよいのかという視点を生徒に実感としてもたせることが重要であろう。

それに加えて，生徒が自分の表現したものを改善しようという気持ちをもてるように，表現する目的をはっきりと示すことは重要である。例えば，動詞の過去形を用いて，夏休みにしたことを絵日記のようにして書かせる活動はよく見られる。生徒はそれまでに学習したことを活かして一生懸命に書いてくるはずである。その場合，過去形の定着を図ることはもちろん大切なのだが，この活動の一番の目的は，夏休みで楽しかったことや感動したこと，驚いたことなどを，英語を使って仲間と共有できるようになることだろう。適切な語句や表現を選択できることも，正確に文を組み立てられることも，相手に伝える上で重要だからである。そのことを生徒に強く意識させたい。

## ４．研究仮説

生徒に，仲間との交流をとおして「伝えたいことが伝わったのか」を振り返らせ，自分が表現したものを吟味，改善させていくことで，『伝える力』を育むことができるだろう。

## ５．研究経過

Ｈ１７～１９　研究主題　　『伝える力』を高める授業の工夫
～教科書を発展的・創造的に用いた活動を通して～

本主題で研究をスタートさせてから最初の３年間は，『伝える力』を生徒の実態に合わせて具体的に６つに分類して示し，それぞれの『伝える力』の向上を目指し，研究を行った。

H20～22　研究主題　　『伝える力』を高める授業の工夫
～伝えることへのレディネスづくりを意識して～

H20～22年度までの３年間は，それまで行ってきた授業を生徒の『気づき』という視点から捉え直し，効果的な授業のあり方や指導法を探った。『伝える力』をより豊かなものにするために，伝える表現を思考するためのレディネスづくりに取り組んだ。また，『伝える力』の基礎・基本となるよう，帯プログラム活動も整備した。

H23～25　研究主題　　『気づき』を促す授業の工夫

『伝える力』を伸ばすために，生徒の『気づき』という視点で学習活動や課題のあり方や教師の役割等を捉え直した。生徒が自分の伝えたいことを表現のために，伝達に対する課題や目標に対し「問い」をもつことや課題達成のために「既習事項を活用する力」が必要となる。自ら学習する生徒を育成するためには，「問い」の発見と『気づき』の繰り返しが重要であると実感した。

## ６．昨年度までの研究

◆「自分の表現したものを振り返ること」について

ここ２年間の実践だが，１年目は「ゆるキャラの紹介文」を生徒に作成させた。生徒同士で紹介文のフィードバックを行わせたり，活動の成果や課題の自己チェックを行わせたりすることで，より良い内容を伝えるための自己の基準や改善の視点を作ることに成功したり，既存の基準に新たな基準を付け加えたりする生徒も現われた。

２年目は，「一番のテレビファンや音楽ファンを探す」という活動を行った。その中で，仲間の情報を集めるために，どのようにして疑問文を効果的に使ったらよいのか，多種類の疑問文をどのように使い分けたら良いのかなど，複数のフィードバックを教師より受けた。そうすることで，より相手を意識して疑問文を伝達の効果の視点で取捨選択する生徒の様子が見られた。ほかにも，疑問文がコミュニケーションを維持するための効果的なツールであることを再確認したと思われる生徒もいた。いずれにせよ，いったん自己表現したものに対する各種のフィードバックやそれに伴う振り返りによって，生徒は自己の表現力の伸長を感じることができたと思う。

◆「よりよい表現を模索すること」について

よりよい表現を模索するには，主に教科書で学んだ既習知識の有効性を実感させることと，表現する目的を明確にすることが重要だと考える。１年目の「ゆるキャラの紹介文」の活動において，自分の英文がなかなか良い方向に改善されないケースで，生徒は基礎知識のさらなる習熟に励まなければならないと悟っていたようだった。これは，生徒が自身の既習知識が足りないと実感したことによって起きた変化であったと思われる。

また，２年目には「一番のテレビファンや音楽ファンを探す」というタスク活動を行った。活動を行う際には，生徒がその活動の目的を理解できるよう配慮した。生徒は目的に照らして自己の作業の状況を振り返っていた。そうして自分の表現したものの不十分さを実感したことで初めて，生徒は自己の表現したものを吟味したり，振り返ったりすることの必要性を感じていたようである。

## ７．研究の実際

第１回事前研究会・中等教育研究会公開授業指導案より抜粋

第１学年　英語科学習指導案

授業者　　関原寛明

１．単元名　　New Horizon English Course 1（東京書籍）　　Unit3　わたしの好きなこと

２．本時の授業

⑴　日時：　平成28年７月１日（金）５校時

⑵　場所：　第１学年３組教室

⑶　本時の目標：目的を意識しながら，自分自身のことについて英語で表現することができる。

⑷　本時で期待する生徒の姿

自分が言いたいことを聞き手に伝えるために，内容を工夫して自己紹介ができるようになる生徒の姿を本時では目指す。具体的には，トピックを絞らず，言いたいことを思いつくままに羅列する「浅く広い」自己紹介のみしかできない状態でいることに満足している生徒ではなく，トピックを絞り，それに関連した情報を聞き手に伝えることのできる「狭く深い」自己紹介もできる生徒の姿。

⑸　本時で期待する生徒の姿を引き出すための手立て

①「視点を変える」活動

本時における「視点を変える」活動は，モデルとなる自己紹介の提示から始まる。異なる２つのタイプの自己紹介を提示することによって，トピックを絞らないことによる「話題が広く内容が浅い」自己紹介と，トピックを絞ることによる「話題が狭く内容が深い」自己紹介があることとその両者の違いに気づかせたい。これまで様々な一般動詞を単文で学んできた生徒にとって，いくつかの文で構成される自己紹介に一貫した話題やテーマを持たせることは難しいと思われる。つまり，「話題が広く内容が浅い」自己紹介を「自分なりの結論」として抱く生徒がほとんどだと考えられるからだ。生徒には，２つのタイプの特徴を理解させ，目的や相手に応じて使い分けができるようにさせたい。そのためには，それぞれのタイプの自己紹介をモデル文として提示して，それらを聞いた印象をもとに文章で中心となるトピックの有無について目を向けさせるのが効果的であると考える。また，モデル文に疑問文や否定文を意図的に配置し，内容に意外性を持たせることで聞き手の注意を喚起するといった工夫ができることにも気づかせたい。接続詞を用いなくてもつながりのある文章が作れることに気づけば，表現される自己紹介文は聞き手を巻き込むものに変わっていくと期待される。

さらに，学習の振り返りをするためには生徒同士の相互評価が有効であると考え，互いの自己紹介を聞き合った後にコメントを言い合う活動も「視点を変える」活動として行う。話し手が意識したことが聞き手にも伝わっているかどうかを確認し，工夫したことが有効であったのかどうかを検証する場面は非常に大切である。相互評価を通して自他の課題に対する問題点を明確化することで，次の学習動機や表現活動の際の目的意識につながると考える。この相互評価により，生徒は自分の自己紹介を振り返り，工夫が妥当且つ十分であったかどうかを見つめ直すようになっていくだろう。

②「視点を変える」活動を効果的にする教師のはたらきかけ

〇学習課題の提示方法

本時の学習課題の提示は，二段階で行われる。一段階目は，「英語で自己紹介」とだけ課題が提示され，生徒はこれまでに学習してきた文法事項を思い出し，自分の言葉として例文をもとに自己紹介文を作り出そうと考えるだろう。つまり，課題解決の見通しをつけるということである。二段階目に，「印象に残る」という語句を付け足し，より具体的な話すことへの目的意識をもって活動に取り組ませるようにする。そうすることで，一度意識した課題解決の見通しについて「本当にそれでよいのか？」という問いが自然と生じ，課題解決の糸口を自ら探るように意識されていくだろう。また，相手との関係や相手の状況などを細かく提示することで，聞き手である相手のことを意識させたり，

より具体的で実際的な言語活動を促したりすることができるようになると考える。さらに，具体的な目的意識を持つことは本時における「視点を変える」活動の一つであるモデル文の聞き取りにも大きく影響する。二段階目の学習課題が，これから聞く２つの対照的なモデル文には「印象に残る」自己紹介にするための工夫や鍵が隠されているということを意味しており，生徒にとってはモデル文の中からその工夫等を見出そうとする動機づけとなるだろう。それは同時に，モデル文を聞くことの目的意識ともなり，「視点を変える」活動の効果を高めることに直接つながっていくはずである。

③「深く考える」授業のための題材，教材，学習課題

ｂｅ動詞や一般動詞を用いて自分のことを表現させるため，自由度の高い自己紹介という課題を設定するが，ただ漠然と自己紹介をするのではなく，「印象に残る」文という条件をつけた目標を与える。そうすることで，聞き手がどのように自分が発した文章のメッセージを受け止めるかということに着目させ，「自分なりの結論」である自己紹介をさらに見つめ直すきっかけを与えることができると考える。

⑹　展開

| 過程 | 教師の支援 | 生徒の活動 | 評価と留意点 |
|---|---|---|---|
| 挨拶<br>（1） | あいさつをする。 | あいさつをする。 | |
| 導入<br>（4） | 本時の目標を提示する。<br>**「英語で、印象に残る自己紹介をしよう」**※　部はこの時点では提示しない<br>自己紹介で使える既習の表現を振り返る<br>I am　（名前，年齢，出身，所属している部活動，〇〇のファン）<br>I like　（好きなもの・こと）<br>I play　（弾ける楽器，できるスポーツ）<br>I want　（欲しいもの）　など<br>前時に練習した自己紹介（既習の表現を用いた10文の自己紹介文）を思い出させ、口頭練習させる。<br>I am ～. I am from ～. I am in the ～ club. I am a member of the ～ club. I am a ～ fan. I like ～. I play ～. I have ～. I study ～. I practice ～. I write ～. I want ～.<br>などのようにトピックにまとまりのない自己紹介文となることが予想される | 本時の目標を確認する。<br>Unit1～Unit3までに習ってきた表現を思い出す。<br>自分なりの結論<br>ペアで，前時に練習した自己紹介を滑らかに言えるように口頭で練習する。 | 適切な音量で練習しているか。<br>既習の表現を使って言えているか。<br>互いの自己紹介を聞いているか。 |
| 活動１<br>（15） | 本時の目標を再度確認する。<br>（自分の部をこの時点で提示）<br>**「英語で、印象に残る自己紹介をしよう」**<br>自己紹介の目的（①自分が伝えたいと思っていることについて知ってもらう，②自分のことをもっと知りたいと思わせる）と状況（①相手は初対面の同年齢の外国人，②夏休み明けの新学期初日）について触れ，モデル文を提示する。<br>ワークシートを配る。<br>視点を変える活動<br>モデル文のトピック（何を中心に自己紹介をしているか）とそれに関わる情報を聞き取らせる。<br>トピックと人物についての情報を口頭で確認し、黒板にまとめていく。<br>（モデル１→モデル２）<br>モデル１とモデル２の自己紹介文の違いについて，考えさせて黒板にまとめる。 | 本時の活動の目的について理解する。<br>教師が示したポイントに注意しながら，モデル文を聞く。<br>教師の質問に答える。<br>気づいたことを発表する。 | 目標と目的を理解しようと教師の話を注意深く聞いているか。<br>タスクを意識して聞いているか<br>教師の問いかけに適切に応じているか。 |
| | 自己紹介文を印象的にするための工夫について黒板にまとめる。<br>**・トピックを絞る**　（・詳しい情報を伝える　・問いかけをする） | 自己紹介を印象的にするための工夫について知る。 | 波線部について生徒の気づきがない場合、教師から提示する。 |

<table>
<tr><td rowspan="2">活動２<br>（10）</td><td>与えられたトピックについて，即興で英文を作るゲームを行わせる。<br>手順とルールを，モデルを示しながら説明する。</td><td>モデルをよく見て，ゲームの手順とルールを確認する。</td><td rowspan="2">グループ内で協力して活動を行っているか。</td></tr>
<tr><td>手順およびルール（４人グループで行う）<br>①教師がトピックを与える。<br>②グループ内の生徒の１人が，トピックに関連する６つの英文を言う。残りの３人は，英文がトピックに関連しているか注意深く聞き，英文の数をカウントする。<br>③英文を６つ言えたら，次の人と交代する。<br>④４人が６つの英文を作ることができたら，終了。<br>・books　・sports　・food　・subject<br>全てのグループが一巡目を終えたら活動を終了させる。</td><td>１つ目のトピックで一巡したら，２つ目のトピックでもう一巡する。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">活動３<br>（15）</td><td>自己紹介文の構成を個人で考えさせる。<br>活動がスムーズに行われていない個人やグループに適切な支援ができるように，机間指導を行う。</td><td>ワークシートの流れにしたがって，自己紹介文の構成についてメモをとる。<br>①トピックを決める<br>②伝えたい情報をまとめる<br>③自己紹介を印象的にするために意識する点を書く</td><td rowspan="2">トピックを絞った自己紹介が即興で行われているか。</td></tr>
<tr><td>自己紹介のアウトライン<br>①あいさつ　②名前　③出身地　④（自分のことについて６文）…　⑤あいさつ<br>工夫した点が有効であった生徒の自己紹介を全体でシェアさせる。</td><td>小グループで自己紹介を口頭で行う。<br>相互評価を行う。<br>発表する。</td></tr>
<tr><td>まとめ<br>（5）</td><td>ワークシートにまとめを記入させる。<br>本時の活動のまとめを行う。<br>あいさつをする。</td><td>ワークシートに活動３のまとめを記入する。<br>あいさつをする。</td><td></td></tr>
</table>

３．授業の考察

事前研究授業では，自分が言いたいことを聞き手に伝えるために，内容を工夫して自己紹介ができるようになることを目指した。生徒が「自分なりの結論」として表現する「話題が広く内容が浅い」自己紹介から，「深く考える」学習活動を経て表現する「話題が狭く内容が深い」自己紹介へと発展させていくために，次の２つの「視点を変える」活動を仕組んだ。１つ目はモデル文の提示である。異なる２つのタイプの自己紹介文を提示することによって，目的や相手に応じて自己紹介文の構成を使い分ける必要があることを生徒は理解した。そのための手立てとして，「自分なりの結論」として表現するであろうと想定した「話題が広く内容が浅い」自己紹介と対比させるように「話題が狭く内容が深い」自己紹介を用い，それを提示しながら，さらにその中に疑問文や否定文を意図的に配置して内容に意外性を持たせることで，その構成の違いだけでなく，聞き手の注意を喚起することができたり，接続詞を用いなくてもつながりのある英文を作ることができたりすることなどへの気づきを促した。２つ目は生徒同士による相互評価である。話し手が意識したことが聞き手にも伝わったかどうかを確認し，工夫したことが有効であったのかどうかを聞き手のコメントをもとに検証することで，自他の課題に対する問題点を明確化することができた。さらに，表現活動をする前に，話し手が意図した工夫をワークシートに明記させることで，聞き手の生徒がコメントをするポイントを焦点化し，活動の振り返りをさせた。

以上の２つの「視点を変える」活動を仕組んだ結果として，本授業を通じて，発表内容と相手意識において生徒の変容が見られた。具体的には，ｂｅ動詞と一般動詞の学習を経て，それぞれの動詞を使った英文を羅列しただけの自己紹介をしていた生徒は，聞き手に話したいことが伝わるように構成を工夫した自己紹介ができるようになった。また，肯定文のみを使っていた生徒が否定文や疑問文を用いることでその内容に幅をもたせたり聞き手を巻き込んだりした自己紹介ができるようになった。生徒同士が実際に交わしたコメントには，それぞれの生徒がねらいをもって工夫した点が聞き手に伝わっているかどうかが記述されており，表現活動の振り返りを促すきっかけになった。学習の振り返りで生徒が記述したものの中には，モデル文に倣ってcall　me　～という表現を入れたりユーモアのある内容を入れたりすることで興味深い自己紹介文にすることができたといった記述があったり，また，自分が話したいことを相手に伝えるためにはもっと多くの動詞を知らなければいけないといった記述もあった。

結論として，「深く考える」授業の実践を重ねていくことで，生徒の表現活動の質が向上したと感じる。「深く考える」授業を展開するために，教師は意図的に「視点を変える活動」を仕組むが，そうした授業では，生徒は既習事項を活用して能動的に学習に取り組む必要がある。また，ねらいに沿った教師や生徒同士によるフィードバックがあり，学習者である生徒は自身の学びを振り返り，成果を実感したり次の自己の課題点を見出したりすることができるようになる。活動の結果更新されていく表現の力が学習の意欲を喚起し，新たな課題に取り組む原動力となっているのだろう。

……

第３学年　英語科学習指導案

指導者　　大　矢　裕　子

１．単元名

Living with Robots　　−For or Against

（NEW HORIZON　　English Course3　　Unit5）

２．全体研究とのかかわり

本校英語科は，前述のように，「『伝える力』を育む授業の工夫」を主題として掲げ研究に取り組んでいる。『伝える力』には，内容構成力と伝達力の２つの力が必要であり，この２つがバランス良くかみ合うことにより，意図したメッセージを相手に効果的に伝えることができると実感している。内容構成力に関しては，４技能の個々のメディア的な違いや互いの相性等による伝達的な効果の特徴を意識させる必要から，日々の取り組みの中で，表現の内容を伝達目標に合わせどのような順番で組み立てていくか等，実態に即した課題や活動を取り入れてきた。特に，「書くこと」においては，生徒は様々な手法とプロセスを伴うwriting課題に取り組み，力をつけてきた。その結果として，文章の質・量や構成についても意識して書けるようになってきている。

もう一つの伝達力に関わっては，書く絶対的な量自体を確保させたり相手意識をもたせることで記述内容や情報の質に目を向けさせることによって，より伝わるためのwriting練習にするにはどうしたら良いかの視点を各自にもたせたりするなど，練習の質を上げることに取り組んだ。言い換えれば，『伝える力』につながるような練習方法を工夫してきた。しかし，練習の目的や方法自体にはまだまだ課題があり，更なる工夫が必要である。したがって，工夫の一環として、課題設定や場面設定の方法にも目を向けることで，生徒のモチベーションが上がり，生徒の練習に対する目的意識も高まり，その結果，伝達力の向上も大いに期待できると思われる。

最後に，知識の応用力の問題がある。一つのことを学習している間はその学習に注目し，その文法や文構造などに意識を向けられるが，それを活用する場面になると，理解したはずの知識を統合したり，また個々が獲得した知識を生かし切れずにいる生徒が少なからずいる。この問題については，今までに扱ってきた文法や文構造に関しての知識を習ったのとは別の文脈でもう一度活用する学習活動などを行い，既習の知識を有機的につなげていく必要がある。また，学んできた多くの知識をテストや英語の勉強に役立つ知識としてのみしまい込んでおくのではなく，活用の中で“コミュニケーションのための道具”という言語としての本質的な働きを生徒に実感させたい。そのために，生徒がコミュニケーションを伴う課題に抵抗なく取り組める工夫をし，語彙や文構造，伝達手段などを活用する表現の場を計画的に設定し，生徒が自分の表現したいことをある程度意のままに伝えられるよう『伝える力』を育んでいきたいし、同時に成就感も感じさせたい。さらに，これらの学習過程において，生徒たちが様々なことに気づき，自分が表現したものに不十分な部分や改善できる部分を発見したときに，どうしたらよりよい表現にバージョンアップができるのかを粘り強く考え，実際に改善を図り，そのやり方を会得させ改善の意義を実感させることで，本校研究主題である「『深く考える』授業の創造」に迫れるものと考える。

３．本時の授業

⑴　日時　　平成28年10月１日（土）（10:00〜10:50）

⑵　場所　　山梨大学教育学部附属中学校　３年３組教室

⑶　本時の目標

〇現在分詞による後置修飾を用いた文の形・意味・用法を理解することができる。

○現在分詞による後置修飾を含む文を用いた活動やその活動のフィードバックを通して，その機能や用途に気づき，表現することができる。

⑷　本時で期待する生徒の姿

これまでに，人や物を紹介したり説明したりするさまざまな表現を学んできたが，ここで新たな表現方法，「現在分詞による名詞の後置修飾」を学ぶ。この方法を用いることで，これまで複数の文を用いて説明していた事柄について，一文で表現できる方法を理解させたい。しかし，その用法を理解するにとどまらず，後置修飾を用いれば，相手に何かを伝えるために情報を加えることが可能になったり，相手からの情報によって説明されているものを特定したりすることができるという機能まで理解している状態を目指したい。したがって，生徒には２文を１文にするという機械的な操作だけでなく，後置修飾を用いるとどんなことが具体的にできるのかそして伝わるのか，後置修飾のいろいろな機能について実感させたい。

⑸　本時で期待する生徒の姿を引き出すための手立て

①「視点を変える」活動…Activity Ⅱ

目的：Activity Ⅰの活動において聞き手と話し手とを体験し，その後のフィードバックを生かしながら後置修飾を活用し，複数の文を用いて説明していた事柄について一文で情報を伝えたり説明をしたりすることが可能になることを理解する。そして，それにとどまらず，この表現を用いれば，相手に何かを伝えるために情報を付け加えることが可能になったり，相手が付け加えた情報によって説明の対象となっているものを判断し決定することが可能になったりすることを学ぶ。

方法：「後置修飾を用いてskitをつくろう！」と課題設定し，現在分詞による後置修飾を用いた文を使い，情報を加えて人物について尋ねたり説明したりする場面のskitを作る。

②「視点を変える」活動を効果的にする教師のはたらきかけ

・本時の最後に行うskitづくりにおいて，生徒が困ることのないよう，スモールステップを踏んだ練習や活動の計画をし，各段階の途中で後置修飾の用法や機能について確認や振り返りをしておく。それにより，後置修飾の理解から使用へのイメージを強化するねらいがある。

・生徒が，後置修飾の機能に気づくような発問をすること。これらの発問に際し，教師からのフィードバックも，生徒の気付きに大きな位置を占めることになると思うので，有効なフィードバックを与えるタイミングと方法についても考えていきたい。

③「深く考える」授業のための題材，教材，学習課題

「後置修飾を用いればどのようなことができるのか」という文法項目のもつ機能に目を向けさせたい。そのためには，実際にどのような場面で使われるのかを生徒が想像できるように活動を仕組む必要がある。後置修飾は，話し手には「相手に何かを特定させるための具体的な情報を付け加える」という機能がある。一方で，聞き手には「相手からの具体的な情報によって説明されているものを特定する」という機能をもち，これらの機能は話し手と聞き手のコミュニケーションにおいて表裏の関係にある。また今回の課題は，場面設定を通して文法項目の機能について生徒に考えさせるという点において，適したものである。

⑹　展開

| Procedure & Time | Student's Activity<br>**※後置修飾に関する生徒の状況** | Teacher's Activity & Help | Remarks |
|---|---|---|---|
| Greeting<br>(2) | ・英語で挨拶を交わす。 | ・英語で挨拶をする。 | 顔を上げ大きな声で. |
| Review<br>(5) | ○「現在分詞」の形容詞的用法（後置修飾）について復習する。<br>・前回の授業で使った写真を見せながら，基本文を確認する。<br>**※後置修飾の形を理解し，文を作ることができる。（生徒の意識は，<u>形式</u>に向いている状況）** | ○「現在分詞」の形容詞的用法（後置修飾）について復習する。<br>・前回の授業で使った写真を見せながら，基本文を確認させる。 | |
| ActivityⅠ<br>(15) | ○活動方法を理解する。<br>○活動する。（ペアワーク） | ○全体で活動方法を確認する。<br>○活動させる。 | *☆この表現を用いれば，相手に何* |

| | | | |
|---|---|---|---|
| | **“Who is ○○?”**<br>様々な動きをしている人物の映ったイラストを見せ，その中の人物について尋ねたり説明したりする。(インフォメーションギャップを用いた活動)<br>Ex.1　A:Who is the boy running with a dog ?<br>B: That’s Mike.<br>Ex.2　A:Do you know the boy running with a dog ?<br>B:Yes. That’s Mike. | | *かを伝えるために情報を付け加えることが可能になったり，相手からの情報によって説明の対象となっているものを判断し決定することが可能になったりすることを実感させる。* |
| | ○活動で，どのような文を用いたか答える。<br>**※後置修飾の形を理解し，与えられた場面で使用することができる。（生徒の意識は，意味に向いている状況）** | ○活動で，どのような文を用いたか尋ねる。 | |
| ActivityⅡ<br>(23) | **「現在分詞の後置修飾を用いて<br>Skitをつくろう！！」**<br>◎４人グループでアイデアを出し合い，現在分詞の後置修飾を用いて表現する場面を設定し，説明したり尋ねたりするskitをつくる<br>(Skitのイメージ（提示はしない))<br>A:We don’t know where to buy the ticket.<br>B:We don’t have enough time to buy it.<br>A:Let’s ask that man wearing the uniform.<br>B:That’s a good idea.　Let’s go!! | | ***←視点を変える活動***<br>*☆これまでは，与えられた場面で後置修飾を使ってきたが，この活動では，場面を設定させることで後置修飾の機能を考えさせる。* |
| | ○Skitをつくり発表する。（４人Ｇｒ.）<br>○どんな場面を設定したのか，仲間の発表から知る。(全体で共有)<br>○後置修飾とは，どのようなものかそれぞれの言葉でまとめる。 | ○Skitをつくり，発表させる。<br>○仲間の発表を聞いて，どんな場面で活用できるか確認させる。<br>○後置修飾とは，どのようなものかそれぞれの言葉でまとめさせる。 | |
| | **【活動のふり返りポイント】**<br>後置修飾とは「　　」働きをもつ。 | | |
| | **※後置修飾の形だけでなく働きを意識して，場面に応じて使用することができる。（生徒の意識は，使用に向いている状況）** | | |
| Consolidation<br>＆ Greeting<br>(5) | ・教師のフィードバックを聞き，自身の活動を振り返る。<br>・英語であいさつをする。 | ・活動の様子を振り返り，成果と課題をフィードバックする。<br>・英語であいさつをする。 | *本時の気づきが明確になるような，投げかけを心がける* |

４．授業の考察

公開授業では，前述したように，後置修飾の２つの機能，つまり，話し手にとっては「相手に何かを特定させるための具体的な情報を付け加える」という機能，もう一方で，聞き手にとっては「相手からの具体的な情報によって説明されているものを特定する」という機能をもっていることを，視点を変える活動を通して理解させ，この文法を用いた表現力を向上させた。今回，現在分詞による名詞の後置修飾を学んだのだが，この方法を用いることにより，これまで複数の文を用いて説明していた事柄について，一文で表現する方法を生徒は理解した。後置修飾は，生徒にとって機械的に複数の文を一文にさせることに意識が向きがちな文法項目である。それ故に，「後置修飾を用いればどのようなことができるのか」という文法項目のもつ機能に目を向けさせたいと思い，実際にどのような場面で使われるのかを生徒が想像できるような授業を仕組んだ。

授業の前提としてまず，生徒は，「自分なりの結論」として形式的（後置修飾の形を理解し，文を作ることができ，生徒の意識は，形式に向いている状況）に，後置修飾を活用し，複数の文を用いて説明していた事柄について一文で情報を伝えたり説明をしたりするであろうと考えた。実際に，本時の授業に入る一つ前の授業において，カード用い

て現在分詞の後置修飾について導入した。その段階や本時の中の復習段階では，生徒は，形式としての理解であった。次に，知識として形式を理解した段階から，「深く考える」段階へと進ませるためのスモールステップとして，インフォメーションギャップを用いた活動をさせた。この段階では，後置修飾の形を理解した上で，与えられた場面でそれを使用することができた（生徒の意識は，意味に向いている状況）。具体的には，現在分詞の後置修飾を用いて，それぞれのワークシートの内容について聞き合う活動をするが，その設定された場面で意味を理解し使うことができるという段階であった。

その活動を経て，生徒を「視点を変える」活動へ進ませた。現在分詞の後置修飾を用いてのskitづくりである。４人グループでアイデアを出し合い，現在分詞の後置修飾を用いて表現する場面を設定し，説明したり尋ねたりするskitをつくらせた。この活動を通して，その機能に気づかせたいと考えたからである。これまでの研究から，活動の成就のためにモデル文等の事前提示の重要性も感じていたが，ここではあえてモデルの提示はしなかった。場面を考えることと，その中に現在分詞の後置修飾を用いた文を織り交ぜることを同時に行うことで「深く考える」ことにつながると考えたからである。場面と台詞を同時に考えることになるが，設定した場面はあえて，日本語でメモする程度に留めた。台詞をすべて英語にしようとすると，その段階では，まだ形式にとらわれてしまい，その文法項目の機能に気づくことはできなくなってしまうと懸念したからである。メモ程度に留めたことで，生徒の現在分詞の後置修飾に関わる概念に広がりが見られた。全てのグループの発表後に現在分詞の後置修飾とは何かを一人一人にワークシートに書かせたが，そこにあげられたものに現在分詞の後置修飾の機能について書かれていたことから，この実践した授業は，「深く考える」授業となっていたと思う。

また，作らせた場面をあえて英語で準備させなかったことは，この活動を，英文を準備させたスピーチではなく，即興場面での伝える活動，つまり即興的な表現力育成の場にしたかったからである。間違いを恐れずにコミュニケーションを図ろうとする態度を生かして，自分の考えなどを瞬発的に発信する活動を取り入れたことでより直接的に『伝える力』につながるような工夫ができたと思う。また，仲間の発表を聞く際にも，モデルを提示せずにそれぞれの発想による発表が，お互いに各自の内容をより深く聞きたいというモチベーションにもつながっていた。

最後に，本時の授業においては，学習した文法や文構造に関しての知識を有機的に活用する活動を行い，既習の知識を有効につなげることができた。既習知識を生徒がそれぞれの文脈の中で活用できるようにするためには，普段から，知識を活用させるバリエーションを示し，どのように活用すればよいのかという視点を生徒に実感としてもたせることが重要であろうと考え取り組んできた成果がここに現れたと思う。また，学んだ知識をテストや英語の勉強に役立つ知識としてしまい込んでおくのではなく，“コミュニケーションのための道具”という言語としての本質的な働きを生徒に実感させることもできたと思う。生徒がコミュニケーションを伴う課題に抵抗なく取り組める工夫をし，文構造や伝達手段などを活用する具体的な表現の場を設定し，生徒が自分の表現したいことをある程度意のままに伝えられるよう『伝える力』を育む場となった。さらに，この学習過程において，生徒たちが気づいた，自分が表現したものの不十分な部分や改善できる部分について，フィードバックを活用することで，どうしたらよりよい表現にバージョンアップができるのかを考えさせ，実際にそうさせることで，「『深く考える』授業の創造」に迫れたと考える。

## ８．研究のまとめ（全体研究とのかかわり）

英語科では全体研究でいう「深く考える」授業を「他者からのコメントや，自分の気づきなどを活かして自分が表現したものを振り返り，既習知識を活用することで改善を図っていく」授業と定義した。そして，そのような授業を繰り返すことで，「身の丈にあった英語を常に更新させながら用いて，自分の言いたいこと，考えや気持ちを話したり，書いたりするなどして，伝え，伝え合うことができる力（本校英語科でいう『伝える力』）の育成」を目指してきた。英語科の研究主題である『伝える力』を育む授業と，全体研究でいう「深く考える」授業は，ほぼ同じものを指していると捉え，効果のある授業のあり方を探ってきた。

◆「他者との交流」（＝「視点を変える」活動）について

英語科においては，「視点を変える」活動として「他者との交流」を仕組むことにより，生徒が自分の表現したものを改善するきっかけを与えることができた。「深く考える」授業を実現するために「他者との交流」が手立てとして有効にはたらいたといえる。「他者との交流」は，自分とは異なる見方や考え方をもった他者の視点から，自分の表現したものを振り返ることができる点で効果的であった。また，生徒に自分の表現したものを改善の対象として客

観的に捉えさせることもできた。ただし，「他者との交流」といっても，ペアやグループの形態による活動のことではない。モデルの提示や他者からの指摘（コメントやアドバイスなど）や他者の表現との比較など，フィードバックを含めた活動のことを指している。フィードバックを受けた生徒の内面には何らかの変化が生じる。そうすると，今までは何も感じなかった自分の表現に違和感を覚えたり，足りないものに気がついたりするのである。英語科で意図的に設定した「振り返り」の場面は，フィードバックやそれによる文章や表現の変化を，生徒自身が認識し，改善に活かしていくために必要なものであった。

次に，英語科が「他者との交流」により期待した４点について総括する。

①表現したものを評価，分析するための観点が明らかになる

内容の面白さや分かりやすさ，言語としての正確さ，文章構成の分かりやすさなど，表現したものを評価，分析するための観点はさまざまである。自分の表現したものを改善するといっても，生徒によって改善の種類や方向は変わってくる。「他者との交流」を行う際に共通理解を図ることで，意識すべき観点が明らかになり，生徒が自分の表現したものを脈絡無くバラバラに振り返ることが少なくなった。

②表現したり，改善したりするための新たな視点を得ることができる

他者と交流することによって，生徒は自分の表現したものを評価，分析するための観点が整理されたり，新たな観点に気づかされたりする。そうすると，生徒はそれらの観点を念頭において，表現しようとしたり，表現したものを改善したりするようになるのである。観点を増やすことは，同時に生徒の表現したものを振り返るための視点を増やすことにつながった。

③自分にはなかった考えや発想，文章の組み立て方に気づかされる

生徒は他者の考えを知ることで，自分の考えとそれを比較する。そして，「なぜそのように考えるのか」「自分の考えとはどのような点で異なるのか」などについて振り返り，もう一度，自分の考えを見つめ直そうとする。たとえ同じ課題が与えられても，生徒によって表現する内容は異なってくるため，他者との交流は，一人では気づかないものに気づかされる大事な機会となる。

④自分が表現したものに自信をもつことができる。

さまざまな観点や視点を得ることで，生徒は多面的・多角的に自分の表現したものを吟味することができるようになった。ライティング活動や準備ありのスピーキング活動では推敲を重ねることで，自分の表現したものが改善されていくことを実感することができたようだ。また，準備なしのスピーキング活動であっても，話す方向を即興的に考えながら生徒は何とか英語で話せたということに満足感を覚え，自信をもつことができたと考えられる。

本校英語科では「深く考える」授業を実現させるために，「視点を変える」活動として「他者との交流」を意図的に仕組んできた。このように多くの効果をもたらす活動であっても，一度ですべての生徒に有効にはたらくことは難しい。また，気づきがあったとしても，それがすぐに劇的な改善につながるとは限らない。何をきっかけにして変わるのかは個人差があるはずである。やはり，学習者の状況を考えながらじっくりと時間をかけ，繰り返し取り組む必要があろう。

◆教科研究主題「伝える力」を育む授業の創造について（「深く考える」授業について）

「他者との交流」を「視点を変える」活動として位置づけ，あわせて学習過程の中に「振り返り」を取り入れたことで，生徒は自分の表現したものを深い思考を通して改善しようとしていた。このように「深く考える」授業の実践を積み重ねてきたことで，英語科の目指す「伝える力」の育成につながる３つの成果が明らかになった。

①活用できる言語知識を増やす

自分が伝えたい内容を相手に伝わるようにするには，語いはもちろん，文法や文構造などに関する知識を増やすことが求められる。そこで，英語科では活動の前に十分なインプットが与えられるよう配慮した。目標となる活動から逆算して，必要な語句をあらかじめ提示しておいたり，目標となる文法を用いたパターンプラクティスを十分に行ったりすることで，生徒は自分の表現したものを改善するための材料を得ることができた。語いや文法，文構造などに

関しては生徒同士で指摘できるようにもなってきており，知識の増加を感じることができた。

②言語機能に対しての意識向上

言語の形式（form），意味（meaning），機能（function）への意識に偏りが見られないように活動を工夫した。特に，言語の機能への気づきが促されるような授業を意図的に仕組んだ。これまでライティングにおいては，生徒の意識が言語の形式や意味に意識が向き，正確さにこだわりすぎる傾向があった。しかしスピーキング，とくに準備なしでのスピーキングに今回取り組んだことで，伝えようとする内容に焦点をあてて改善を図る生徒の姿が見られた。また，活動で対象となる文法については，生徒の意識が言語の形式や意味から機能へと移り，どのような場面で当該の文法事項が用いられるのかを考える生徒の様子がうかがえた。

③相手意識を高めること

本研究での授業では，実際のコミュニケーションを想定して英語を使う経験を積ませてきた。そうすることで，相手に何かを伝えるために表現する必然性が生まれ，おのずと伝える相手を意識することにつながった。生徒は，自分が表現したものはこれで良いのか，さらに工夫する必要はないかと振り返りをしたり，仲間が表現したものの良さは何か，反対に伝わらないと感じるところはどこかなどを探したりするようになった。自分が表現したものは相手に理解されるものであったのか，相手の興味をひくものであったのか，相手のニーズにあったものだったのか，と見直すことは，本研究で目指す「伝える力」をつけるために，さらには「深く考える」授業のために不可欠な要素であり，相手意識が高まったことによる効果だといえる。

さて，ここまで「振り返り」を活かした学習過程を工夫することで，「伝える力」を育む授業を創造することができ，上記のような成果が明らかになった。それと同時に，今後，取り組むべき課題がいくつか見えてきた。

教師が意図的に仕組んだ授業やその学習過程においては，既習知識を基盤として伝達効果を考えながら自己の表現の質を考える等，期待する生徒の姿を見ることができた。しかし，自立した英語学習者としてはやや物足りなさを感じることもあった。例えば，生徒には自ら言語知識を増やそうとする姿勢をさらに期待したいと考えた。「こんなことが言いたかったのに言えなかった」と自分の「言いたいこと」と「言えること」のギャップを感じたときに，足りないものを補おうとする姿勢をもってほしいのである。また，生徒には今もっている知識をフルに活用して，伝えたいことを何とか伝えようとする力をもっと身につけていってほしいとも思う。今回，研究がライティングからスピーキングへと移行したことで，自分のもっているもので表現してみるという気持ちをもつことの重要性を，生徒も強く感じたはずである。今後は一層，生徒の即興性を高め，ダイナミックに英語でコミュニケーションできる力の育成を目指したい。

最後になるが，「伝える力」を育む授業や，その手だてである「他者との交流」で，生徒は自分と異なる表現に出会い，さまざまな観点や視点にふれてきた。そして，それをきっかけに自分の表現したものを見直したり，自分のものごとの見方や考え方を捉え直したりした。このような学習は，まさしく自主自律の力を養うものであり、この力は最終的には世界に深く関わる姿勢をもつようになることで国際理解，異文化理解につながるものである。こうした能力の育成は，英語（外国語）を学ぶ目的や意味にも大きく関わる，たいへん価値のあるものであった。私たちも「深く考える」ことを大切にしながら，今後も実践研究を進めていきたい。

## ９．参考文献

○山梨大学教育人間科学部附属中学校平成26年度研究紀要
○山梨大学教育人間科学部附属中学校平成27年度研究紀要
○文部科学省　「中学校学習指導要領解説　外国語編」　平成20年９月